

## 岩波哲男先生手記

### はじめに

早稲田大学百五十年史編纂委員会では、『早稲田大学百五十年史』の編纂を目的として、総長・理事・教職員・学生など、様々な立場で早稲田大学に関わってこられた方々からの聞き取り等を進めている。その一環として、今回は、故岩波哲男先生（元本学文学部教授）が生前にお寄せくださった手記を掲載する。

本手記は、学生運動を中心とした回想録であり、二〇一二年から数回に分けてお送りいただいたものを一つにまとめたものである。二〇一七年三月、岩波先生はお亡くなりになり、途中までのご寄稿となったが、この度、ご令閨の岩波宏子氏よりお許しを得て、掲載の運びとなった。

岩波先生のご略歴は左記の通りである。

一九三二年生まれ

一九五二年 早稲田大学第一文学部西洋哲学専修 入学

一九五六年 早稲田大学第一文学部西洋哲学専修 卒業

早稲田大学大学院文学研究科西洋哲学専攻修士課程 入学

一九五八年 早稲田大学大学院文学研究科西洋哲学専攻博士課程 入学

一九六〇年 淑徳短期大学講師（一九六二年）

一九六二年 西ドイツ・テュービンゲン大学留学（一九六四年）

一九六五年 早稲田大学文学部専任講師

一九六八年 早稲田大学文学部助教授

一九七三年 早稲田大学文学部教授

二〇〇〇年 退職

二〇一七年 逝去

右記の間に、第一文学部教務副主任（一九七〇年）、第二文学部教務副主任（一九七二～一九七三年）、第一文学部学生担当教務主任（一九七三～一九七四年）、第二文学部長（一九八四～一九八六年）、第一文学部長（一九八八～一九九〇年）などを歴任した。また、早稲田大学キリスト教青年会副会長（一九六八～一九八九年）、同会長（一九八九～二〇〇〇年）に就任した。

主要著書に、『ヘーゲル宗教哲学の研究』（創文社、一九八四年）、『旅人の思索』（早稲田大学出版部、一九九一年）、『ヒリズム』上・下巻（理想社、二〇〇五・二〇〇六年）、『ヘーゲル宗教哲学入門』（理想社、二〇一四年）などがある。一九八二年に文学博士号を取得。

この度の掲載にあたり、手記をお寄せいただいた故岩波哲男先生にあらためて感謝の意を表するとともに、委員会の依頼に快く応じてくださった岩波宏子氏に厚くお礼を申し上げる。

（早稲田大学百五十年史編纂委員会）

## 一 学生時代から就職まで

最初に、早稲田大学に入学した頃の時代背景から述べましょう。一九五二（昭和二七）年四月に文学部哲学科西洋哲学専修に入学を許されました。それは第二次世界大戦が一九四五（昭和二〇）年に終結して、一九五〇（昭和二五）年には朝鮮戦争が始まり、社会はまだ戦後の状態の頃でした。そろそろ、復興景気と戦争の特需に沸き始めていますが、そういう時は、人心も荒れるものです。

大学入学の年、メーデー事件が起こっています。メーデーに関わった学生の捜査のために私服の警官が学内に入り、当時は学内への警察官の立ち入りは大学から許可を得なければ入れないことになっていたのですが、この警官が学生に怪しまれ、長時間にわたり拘束され、この警官を救助するために機動隊が導入され、本前で混乱が起きました。

またこの頃、破壊活動防止法が国会に提出され、当時の全学連が反対運動をしていましたが、その反対デモを大学に無断で学内に導いたということで、文学部の学生が一名除籍されました。その除籍に抗議して、学生の集団が当時

の谷崎精二学部長の授業に押しかけ、いわゆる団交となりました。たまたま大学に来ていた私は、この学生たちの集団が、元の文学部校舎（後に教育学部、法学部に利用された校舎）の四階の大教室で講義中であつた谷崎精二学部長を取り囲んでその学生の処分の理由を問いただそうとしたのに出くわしたのです。そのうち他の先生方が集まってきて、教室の前にある読書室で学生たちと先生方とのいわゆるミニ団交となり、処分について教授会でよく検討するということで散会となりました。

まだ入学して間もないので、その時見かけた先生方の名前はよく知りませんでした。哲学科の岩崎勉先生と檜山欽四郎先生だけは鮮明に覚えています。やがて処分を受けて除籍されたのは、後に岩波映画社で活躍した土本典昭氏です。氏は記録映画作家として数々の賞に輝く良い仕事を残していますが、二〇〇八年に七九歳で亡くなっています。このような交渉は初めて経験することですが、まだ何も分からずに過ぎました。

学部時代は、親との約束により、授業料を幼稚園であるわが家で開いていた塾の塾生の子どもたちに教えることによつて稼ぐ事に専心して終わり、学問をつづけたいと大学院に進学しました。学内ではたいした事も無く、大きな台風（伊勢湾台風）が来て、知り合いの学部の学生など、いわゆるボランティアの救援活動をどう進めるかで大わらわでした。

その後一九六二年から一九六四年まで、ドイツ学術交流会（DAAD）の奨学金で西ドイツ、テュービンゲンで哲学を専ら学ぶという恵まれた時を持つことができました。

東京オリピックが一九六四年に開催されました。神戸から横浜にむかうフランス船上で開会式のラジオ放送を聞いたことを覚えています。二年間のドイツ留学からちょうど帰国したときでした。一九六四年に帰国後、職はまだ決まっておりませんでした。それで取りあえず雑司ヶ谷の元のわが家で塾のアルバイトを続けていましたが、六五年の

四月から文学部の哲学科に属しながらドイツ語を教える専任講師の職が決まり、住居も田園調布駅近くに家を借り、東京での生活が始まりました。最初田園調布の町に住んだのは、妻が仕事に通うのに便利であったからです。後に「田園調布に家が建つ」ともて囃された時代がありました。この頃はそんなことも知らず、不動産屋の紹介で、おそらく田園調布一小さい一戸建ての、六畳三畳台所、風呂付きの家に引越しました。ある人が自分のまわりに五軒の家を貸していたのですが、その一軒を借りました。そういう所でも、隠すことなく、ドイツ人の友人でも招待しました。家を見て開口一番、「あなたがたはどこに寝るの」と言っていたのが印象的でした。

## 二 研 究 生 活 の 開 始

一九六五年四月から文学部の専任講師としてドイツ語を教えることになりましたが、専任講師は当分の間、五年間位、一切の義務から解放されて、授業の準備をすることを許されており、教授会への出席も免除されておりました。そのため学内の学生の動きなど、公式の情報が入ってきませんでした。

専任講師になると間もなく、松浪信三郎先生から、河出書房からヤスパースの『哲学の学校』の翻訳をやるので手伝ってくれないかという話があり、その下訳をやりました。しばらく田園調布の狭いわが家でヤスパースと向き合っていました。この時、翻訳のコツの手ほどきを受けたと思いますが、しかし今考えると、同時にドイツ語の実力をテストされていたのでしょう。ヤスパースが終わると、ロロロ伝記叢書の中の『サルトル』を訳してくれないかという話を持ってこられました。サルトルの『存在と無』の訳者である松浪先生は、サルトルの伝記の訳者を探しておられたようでした。ロロロの伝記叢書はドイツ語で書かれ、サルトルの伝記はフランス語で書かれたものが多く、フ

ランス語を専門とする人はドイツ語で書かれた伝記を訳すことを好まないという事情があったようです。これは専任講師の時代のことですが、自分としては徒弟時代のつもりで、何でもやってやろうという気があって、しばらくサルトルに取り組みました。これでドイツ語の試験にパスしたのでしよう。次に河出書房の「世界の大思想」シリーズの中の一冊として、K・バルト『ローマ書講解』を小川圭治先生と一緒に訳すことになりました。小川先生は私がチュービンゲンに留学していた頃、バルトの下で学位論文を書き、ある会議でチュービンゲンにお出でになった時、堀光男牧師（当時チュービンゲン大学学生牧師）が小川先生を紹介して下さいました。そんなわけで、世界の大思想の監修者松浪先生と田中美知太郎先生（京都大学での小川先生の恩師）の推薦で、バルトを共同で翻訳するという大仕事に取りかかることになりました。

一九六八年頃、雑司ヶ谷の実家の幼稚園に変化が起こります。雑司ヶ谷及び池袋周辺はだんだん子どもが減り、近所にあつた五つぐらいの幼稚園が次々と閉園になり、わが家の幼稚園もこのままでは経営不可能になることが目に見えて来たのです。それで、兄たちは相談して、幼稚園をどこかの住宅地に移し、当分は雑司ヶ谷でも園をやるが、いずれ廢園にしようということになったのです。それで兄一家は新しい幼稚園を横須賀に開園し、雑司ヶ谷の方は姉と母が残ることになったのです。引越していった兄の一家に代わって、六九年春頃、われわれが田園調布から実家に戻ることになりました。今にして思えば、まるで大学紛争のために雑司ヶ谷に越して来たみたいになりました。

### 三 第一次早稲田紛争の頃

話が少し戻りますが、一九六五年に第二学生会館問題が起こり、大学は徐々に紛争状態になっていきます。学生会

館問題に追い打ちをかけるように、授業料値上げ問題が六六年二月に起ります。文学部の専任になって間もなくのことで、授業料値上げ反対でいわゆる大衆団交が開催されました。全学の学生代表大口昭彦君が時の大濱信泉総長に質問をし、大濱総長がこれに答えるという形で説明会を開くことになりました。学生は二〇〇〇人近く、『早稲田大学百年史』第五巻には二二〇〇〇人とありますが、実際は一五〇〇〇人以上はいたように見えました、教職員も多数、総長のすぐ脇、周りに、なんとは無しに無秩序に集まり、私はそこで壇上から様子を見ていました。総長は、自分の前で総長を取り囲む活動家の野次に、その後ろの方の学生集団が目に入らないように、説明を拒否して、長期紛争になりました。その団交の時、記念会堂で、会場の混乱を壇上からつぶさに見ながら、これからの職場が大変なところになると思い記念会堂を後にしたことを思い出します。事実それから授業料値上げ反対の全学ストライキになり、紛争が長く続くことになります。

もともと学生会館の管理運営の権利をめぐる、学生は大学が管理運営を行うという形の学生会館には反対していましたが、大学は、セクトの拠点になること、そして不法に泊まり込むことを恐れて、管理運営権を学生に渡そうとはしませんでした。加えて、授業料値上げ反対を表明する全学の学生自治会による全学ストライキが、混乱に拍車をかけました。この時大学は、入学試験を機動隊に守られるという形でどうやら乗り切ったのですが、卒業式は中止、新年度に入ると大濱総長は辞任、代わって阿部賢一新総長となり、混乱が一時的に収まったかに見えました。一九六八年六月には阿部総長が辞任し、選挙によって時子山常三郎先生が新しい総長に選ばれました。

これと平行して文学部の方も学部長以下教務において異動がありました。専任講師になったときは恩師の榎山欽四郎先生が第一文学部長、二文は新庄嘉章先生でしたが、一九六六年大濱総長団交のあと阿部総長代行が一時大学をまとめた頃、文学部でも臨時に、一文では暉峻康隆先生、二文では本明寛先生がそれぞれ学部長に就任し、さらに六六

年九月に、一文では本明寛先生、二文では小杉一雄先生が正式にそれぞれの学部長に選ばれました。

最初に述べましたように一九六五年に専任講師としてドイツ語を教えていましたが、同時に一年生のクラス担任を仰せつかりました。同僚がどのようにこの制度を活用しているか知りませんが、ドイツ留学時代にドイツの教授たちが面会時間を設け、学生の疑問と要望にこたえていたことを思い出しておりました。私もドイツの経験を生かして面会時間を設けて新人の学生たちの便を図りました。研究室でお茶を飲みながら、クラスの学生といろいろ話し合いをおこないました。あるとき一人の学生が研究室の面会時間にやってきて、英語のN先生は授業を全然やらないのですと訴えて来ました。びっくりして事情を聞いてみると、N先生は一時間目の授業は朝八時から始まるから、学生にとっては大変だろうから教室での授業はやらない。各自教科書だけはよく読んでおくように。ただ前期と後期の試験だけは受けておくように、と言ったそうです。驚いて、そのときの教務主任であったM先生にそのことを報告して善処するように申し入れましたが、まだ新米の教師でしたので、その後どうなったかまでは追跡しませんでした。実は紛争の最中、教師たちだけで集まり、大学の歴史についての勉強会を何回か開きましたが、その時、現代におけるドイツの大学の現状について発言しました。ドイツの大学では、時計が正時に時刻をしらせ、一五分たつて時計が再度時を告げると（授業は一五分後れで始まります）正面入口の扉が開いて講義をする教授が入ってきます。この話をすると、ある英文科の先生が「岩波さん、西条八十先生は年に二回ぐらいしか授業をやらなかつたですよ。むかしは鷹揚でした」と言いました。私は発する言葉を知りませんでした。今日では許されないことでしょう。

もう一つ、私の教師生活の初めを驚かせたことで以下のようなことがありました（そして以後そのような学生はいませんでした）。後期の試験も終わり、合格点に達しなかつた学生のため追試を行うころ、一人の学生が「先生の試験問題が洩れていますよ」と訴えに来ました。この学生は、世の中少し脅かせば何とかかなると言っていた学生で、教師



を脅かせば何とかなると思ったのでしょうか。こんなことをしなくても努力を認めることが出来れば合格点を付けたのに、本人は人を脅したという重荷を心にもって生涯生きることになるでしょう。反省すれば良いのですが、どうでしょう。当時の学生担当教務主任（通称「学担」）にだけは報告しておいたのですが。

この頃日本は高度成長期で、毎年何パーセントも物価は上昇し、少なくとも二年ごとに授業料を値上げせざるを得なくなりました。そのたびに学生は授業料値上げ反対のストライキをすることになり、大学当局、また学部当局は対応に追われ、新米の教師である小生もだんだんそれに巻き込まれるところとなりました。しかもこの頃政府は、このような学生の動きを取り締まるための法案を国会に出してきました。先に一九五二年には破壊活動防止法、やがて一九六九年には「大学の運営に関する臨時措置法」を提出しました。このような大学立法に学生が反対しないわけはありません。

一九六七（昭和四二）年頃から、単なる教授会ではなく、講師や助手を含め専任全員の出席可能な教員会形式に変更して、情報を誰でも共有できるよう改められました。その結果、学部と大学の様子がよく分かってきました。

一九六八年秋には新しい第一文学部長に戸川行男先生、教務担当教務主任に山本俊郎先生、学生担当教務主任に金本源之助先生、第二文学部長に押村襄先生、教務担当教務主任に小山宙丸先生、学生担当教務主任に外木典夫先生がそれぞれ選ばれました。

#### 四 全共闘への失望

一九六九年の新学期の頃、この年東京大学医学部紛争がこじれて、安田講堂占拠をきっかけにして、東大の入学試

験が中止となりました。私はクラス担任となった新入生のクラスの中に東大で入試があれば東大に入ったであろうと思われる優秀な新入生のほかに、当時全共闘と呼ばれるグループのセクトのメンバーと思われる学生がいるのに気がつきました。この学生は文学部の自治会（革マル）系の学生とは対立した学生でありました。いわゆる全共闘というグループが何を主張しているのかに耳を傾けました。彼らは硬直してどうしようもなくなった既成権力の解体を目指し、各人が各人の責任においてこの運動に参加する、ということです。日本の政治を見ていると、もうどうしようもなく硬直化、反動化しており、単に問題点を指摘するだけでは変革のしようがないということです。その主張を聞いているだけでは、若者のエネルギーを感じて、大いに共感を覚えたものです。

ところが、五月一九日夕刻から、文学部の一八一教室で学生大会が開かれ、自治会系の提案が拒否されました。文学部キャンパスの主導権争いに敗れたわけで、それを合図に学外から全共闘系の学生が入構してきました。文学部の自治会の学生は、心理学棟の一階奥の自治会室に立てこもりました。やがて外部の学生たちは、この部屋に向かって、石を投げたり、バルサンに火をつけて投げ込んだりして攻撃を開始しました。文学部の社会学の秋元律郎先生とドイツ文学の山田広明先生が止めに入って投石を受けて額のあたりに怪我をしました。ちょうど私のクラスのくだんの学生を見かけたので、この混乱を何とかしろ、君たちのリーダーはだれだ、と言うと、「私たちはみんな自主的に参加しているのです。リーダーはいません。こうなつてはどうしようもありません」。これが答えでした。全共闘運動にかすかな期待を寄せそうになっていた私の思いは、この時潰え去つたと思っています。時の政治や体制に対する批判は強く、鋭く真実を突くものがあつても、運動は挫折することもあります。その時、自分たちのやったことに誇りを持ってなく、運動自体がばらばらになり、大学によっては研究室を占拠した学生が、研究室にあつた貴重な文献や資料を破壊し、その後研究者の研究に支障をきたした大学もあつたと聞いています。その極端な形が日本赤軍派によるリ

ンチ殺人事件でありましょう。時の戸川行男第一文学部長は機動隊を導入し、混乱を沈めようとはしました。全共闘の学生たちは裏の扉を乗り越え、文学部の自治会系のリーダーを何人か拉致し、理工学部で彼らに暴力を加えて散会したと聞きました。大学に機動隊を導入することはご法度であったためか、当時NHKの社会部の記者がかつての哲学科のクラスメイトで、彼は執拗にだれが機動隊を導入したのかを聞きましたが、答えませんでした。そう言えば、三田誠広氏の『僕って何』という芥川賞受賞作品はこの時の文学部の事件を背景にして作品にしたものです。彼は最近『早稲田一九六八』という作品でその頃の早稲田を描き出しています。

## 五 一文の教務副主任となつて

一九六八年、すでに助教教授になっておりましたが、それまで助教教授は教授会のメンバーではお客様みたいな立場でありますから、積極的な関わり方はしていませんでした。そして、六九年五月の文学部の混乱に遭遇したのです。この頃、東京中の大学が授業料値上げ反対や、政治的スローガンのもとストライキに入るといふ状況がありました。その結果、学生への対応が甘いということで、一文の学部長が辞任して二文の学部長以下役職者がそっくり一文に移りましたが、どこが学生に甘いのか、私はよく理解できませんでした。学内のムードはまだよく理解しておりませんでしたので、戸川学部長は学生（自治会）の主張をよく聴いていると思い、良い学部長だと思っていたのです。しかし、全体から見れば学生の言いなりになっていたといふことらしいのです。言ってみれば、学生との争いを避けるため、できうる限り学生の要求を認めようとしたらしいのです。ちょうど、ストライキ中でキャンパス内には関係者以外立ち入り禁止の時でした。そのとき戸川前学部長と一緒に正門の所で警戒の任務に就いていました。戸川前学部

長は多分ストレスがたまっていたのでしよう。この時、「活動家の学生なんかみんな捕まえてしまえばいい」と吐き出すように言いました。おそらく、学生自治会と争い、文学部が紛争状態となるのをよしとしなかったのでしょうか。客観的には自治会に甘いとみられました。自治会の言いなりになっている、と見られることを戸川先生自身は本当は欲していませんでしたが、無理して自治会の言うことを聞きそれがストレスとなり、自由の立場から思わず「捕まえてしまえばいい」という発言になったのでしよう。いまになってその心中を同情をもって理解できます。しかし、大学は学生とは妥協できないときがあるのです。そのことは、後になっていやというほど経験することになるのです。

ところで、二文から一文に移った新しい押村襄学部長以下教務全員は大変な激務でした。ちょうど大学立法反対のストライキか授業料値上げ反対のストライキ中であつたと思いますが、内ゲバを警戒して、大学の近くにお住まいの方、お若い方はどうぞしばらくお残りください、と教務から声をかけられ、若くて近くに住んでいる者として、早く家に帰ることはあきらめざるをえませんでした。そして、ある日の教授会で押村第一文学部長から、疲れているので辞任したい、特に教務の諸氏が疲労困憊しているので辞任を認めて欲しいと願ひ出がりましたが、教授会はこの願ひ出を却下してしまいました。

この頃のこととして忘れることの出来ないことは、各専修（二六専修）の代表とのいわゆるミニ団交に出席したときのことでした。学生は代表が授業料値上げの理由とそれに対する態度について出席教師の一人一人に問い、同時にストライキの責任として学生の処分を認めるかというような質問を教師に投げかけて来ました。私には、一年生の時クラス担任をやつて顔見知りとなつた学生側の代表が「学生の処分をどう思いますか」と聞いてきたので、原則的なことを答えておけば問題はないと思つたので、「学生の処分とは例えば盗みややつたなど破廉恥罪を犯した時などは処罰される」と答えましたが、それ以上のことは質問してきませんでした。彼は少し手心を加えて質問したのではな

かろうか、と心の中で思いました。

このミニ団交において学生と丁々発止とばかり議論を交わしていたのは、学生担当教務主任の外木典夫先生でありました。外木さんのような人がいることをこのとき初めて知ったのです。なにしろ学生の要求に応えて、この頃四〇回以上こうした団交を行ったと語っていました。残念ながら彼は急逝しています。

役職の内、二文から一文へ移ってきた教務のうち教務副主任が役職辞任を申し出ました。そのことを聞いて、私ではなければお手伝いします、と申し出て、残りの任期数ヶ月を一文の教務副主任として働きました。

## 六 二文の教務副主任としての活動

一九七〇年、学部長の任期が終わり、一文の押村学部長は交代して、引き続き新しく選出された第二文学部長の辻村敏樹先生から教務副主任として残って欲しいと要請されました。固辞したのですが、最後は断りがたく、半年遅れで七一年四月から、再度今度は第二文学部の教務副主任に就任しました。これからの数年は、大学の研究者とは思えない、壮絶な毎日が続きました。

何もなければ週に一日ぐらい研究日で休めますが、学部自治会はその勢力を維持するために、監視の目の及ばないところで、反対派の学生を取り囲んで小突き回すことはしょっちゅうありました。それで大体毎日出勤ということになりました。事務所に小競り合いの報告があると教務の出番で、時に乱暴を受けている学生をかばう形で割って入ることもあり、一緒に小突き回されたりしました。警察力を持たない学部当局のできることには限界がありました。だから、七二年秋の川口事件は起こるべくして起こった、と言えるかも知れません。

その当時、大学は夜間立ち入り禁止になりました。学生は一〇時を過ぎるとキャンパスを出なければなりません。時間になると立ち入り禁止を学内でアナウンスするのです。しかし自治会系の学生はキャンパスを出ようとしました。それで、先ず一〇時過ぎに当番を決めて、教員の輪番で全教室を一つ一つ回ります。「夜回り」と呼んでいました。夜回りのとき自治会室を見回ると大抵自治会系の学生が残っているのです。彼らの帰宅後に自治会室を調べると、鉄パイプの準備をしたり、火炎瓶を作って置いていたりしていることがあります。ある時ここで作ったとされる鉄パイプで襲われた学生が怪我をしたということが判明しました。その時以来、教務はこれらを処分してから帰ることにしました。そうしてから帰宅すると、家に帰るのは真夜中になります。つまり早稲田大学の文学部の教務はガードマンのようなことをやっていたのです。

学生の運動がだんだん過激になるに従って、学生のやり方もだんだん過激になっていきました。学生は準備した鉄パイプ等を巧妙に隠すようになりました。いくつか挙げてみますと、二階女子トイレの天井裏、一八一大教室の教壇横にある倉庫の中などに凶器を発見して、これを処分して帰宅するのですが、さすがにこの処分に対して自治会側も抗議はできませんでした。

この自治会系の学生、自ら自治会と呼びながら、何の責任も負うことが出来ない彼らグループは、自ら自治能力を放棄した集団となり、やがてこの責任を負わされ解散を命じられることになるのです。しかし、なぜこのような集団が生まれ、大学の中に存在し続けることが出来たのでしょうか。警察力を持たない大学として、できることをやるより他はありませんでした。

このガードマンのような困難な仕事を一緒に担ったのは、二文の学部長である日本文学の辻村敏樹先生、教務担当教務主任で東洋哲学の菅原信海先生、学生担当教務主任でフランス文学の小林路易先生でした。小林先生は私が途中

から教務の仲間に加わったことで心配したことがあったそうです。それは学部長の家はお父上が熱心な天理教の信者であり、菅原先生は当時日光輪王寺照尊院のお坊さんであり、そこにクリスチャンの岩波が加わると宗教戦争が始まるのではないかという心配です。小林先生はいわば自由思想家で、宗教にとらわれない立場に立っておられたのですが、この四名と当時の二文の事務長井上幸夫さんを加えて、激しい大学の動乱を乗り切ったのです。いわば、戦いに共に戦った戦友であるという意識がわれわれに芽生え、教務を解散しても辻村先生の發議により、五人の会を五友会と名付けて時々会って旧交を温めていましたが、癌を克服して奇跡のカムバックをし、京都妙法院門跡となった菅原信海和尚と私を除き、他の人は亡くなってしまいました。それにつれて五友会は消えてしまいました。かつてお互いに相手の立場を尊重し敬意を以て事に当たったことをわれわれは忘れませんでした。

教務の任期は二年間ですが、われわれのチームは一九七〇年九月からはじまり、私のみ半年遅れでこのチームに参加しました。われわれのチームと平行して一文のチームが学部長である英文学の古川晴風先生、教務担当教務主任がフランス文学の品田三和一良先生、学生担当教務主任が美術史の佐々木剛三先生、副主任が心理学の富田正利先生の諸先生でした。

教務の仕事以外に授業のことを話しますと、専任でドイツ語を教えていた時には七コマ（一コマ＝九〇分授業）は義務で、時に八コマ、新米の教師には意地悪としか言いようのない時間割、たとえば土曜日の夜一〇時に終わる授業をやつて、月曜日一時間目を持たされるといふようなこともありました。教務のような激務になつても、二文の場合夜なので午前中の授業は免除されましたが、コマ数はせいぜい一コマ減らされるぐらいでした。

こういう状態では著書を書くことは難しく、こんな状態でもできることといえば、自分で考えなくても、人の考えたものを翻訳することぐらいだと諦めて、やがて研究に専心できる日も来るであろうことを夢見て、論文の方

はいくつか書くに留まりました。だからこの時代、翻訳が沢山あります。ヤスパースやバルトのほか、印象的なのはシュルツの『近代形而上学の神』を出版したこと。シュルツを日本に最初に紹介したのは私です。その後『変貌した世界に於ける哲学』を東大系の人たちが翻訳し、その後シュルツの原著が何冊も翻訳されます。またこの頃バルトの『十九世紀のプロテスタント神学』の最初の「十八世紀の人間」の章を翻訳しました。これは東京神学大学の佐藤敏夫氏から依頼があり、いち早く訳して渡しておいたのです。ところがその訳した原稿を紛失したので、済まないがもう一度訳してくれと言われ、まだワープロもない手書き時代で、佐藤氏の無責任さに腹を立てながら、表面上はここにこしながら、いいですよ、もう一度やりますよ、と言って訳し直したという経緯があります。今ならコンピュータに控えがありますが、その頃はそんなものもなく大変でした。

一九六八年六月には阿部賢一総長が辞任し、選挙によって時子山常三郎先生が新しい総長に選ばれたことは述べました。そして七〇年には時子山総長から村井資長総長に代わりました。しかし、授業料はどんどん値上げせざるをえず、どの大学も授業料値上げ反対の学生たちの批判にさらされておりました。この傾向は七五年に私学助成法案が決定することによって下火になるまで続きました。七六年頃にはまだ授業料値上げが続きました。

一九七一年四月から半年遅れで、辻村第二文学部長の要請を受けて教務副主任として教務主任の菅原先生を助けることになったのですが、まるでガードマンのような毎日が続いたことは述べたとおりですが、ここで全く思いがけない経験をしたことを報告しておきましょう。

確か一九七二年の初めであったと思いますが、授業料値上げを巡って紛争状態になり、大学本部としては入学試験の実施に不安な気持ちがあった時期です。七二年の初めの学部長会議において、これから始まる入試を妨害された場合を考え、入学試験の問題をもう一つ予備につくっておくほうがよいかどうか、各学部において検討して場合によつ



ては予備の入試問題をつくって下さい、という話がありました。私は、大学本部は何を考えているのだろうか、文学部はそんな無駄なことをやらなければよい、と心の中でつぶやいていました。

会議が終わって文学部に戻って、一文と二文の打ち合わせがありました。もちろん入試問題の予備を準備すべきかどうかの打ち合わせであろうと思っていました。今にして思えばもつと慎重に発言すれば良かったのですが、その前後のことは覚えていません。しかし、「本部の要望に応じて予備の入試問題を作らなくてもいいのではありませんか。」という私の発言は、一文の教務主任によって、言下に否定されました。「このことは会議の後本部キャンパスから帰る時歩きながらずっと一文学部長と話し合って決めたことだ。副主任は黙っている。教務主任と学部長が決めたことに副主任は異議を唱えるべきではない。そんなことをすれば、序列の意味がなくなってしまう」。一文教務主任のこの発言に啞然として声を失いました。一文の学部長は何の発言もしませんでしたから、このことはほとんど一文の教務主任の主張だったのでしよう。本部は、学部でよく協議して決めて下さいと言っていました。二文側の意見は反映されず、そのまま二文の教務の部屋に戻りました。戻るやいなや、菅原二文教務主任は私に「岩波さん、一文に何も言えずすまないことをしました。堪えて下さい。」と言いました。それから文学部の先生方は大至急予備の入試の問題作りをせざるをえませんでした。そして、予備の問題はこの年使う機会はありませんでした。ほかの学部では予備の入試問題を作成したということはなかったと聞いております。真偽のほどは分かりません。

大学は物事の真偽を問題とするべき所です。発言者が誰であれ、その内容によって、真理であればそれに従うべきです。残念ながら、先輩、後輩、主、副、教授、助教等の序列などは、真理の前には関係ありません。まだ古い賛成できない体質が残っていたのです。

## 七 川口事件

いつのことか記憶は曖昧ですが、教授会で発言したことがあるように思いますが、文学部の学生自治会はいわゆる革マルと呼ばれていた集団で、この集団は、学内の主導権争いを、特に学生会館を自分たちのセクトが牛耳るために暴力的に奪い取ったらしいという風評がありました。社青同解放派というのは本来社会党と関係のある青年組織でありましたが、この頃は少し過激な学生集団となり、公安の注意集団となっていました。早稲田では政治経済部にその拠点をもつと見られておりました。なお法学部は民青（共産党系）がガッチリ自治会を守っておりました。なお中核派は法政大学を拠点としているといわれていますが、早稲田にはいないようです。それは革マルが強いからでしょうか。革マルが暴力で学生を支配しようとするれば、暴力によって支配を維持するよりほかはない。その結果、セクトと関係のない学生に対し闇雲に暴力を振るう結果となる。川口事件は起こるべくして起こったと言ってよいでしょう。当時第一文学部二年生の川口大三郎君は、一九七二年一月八日、自治会室隣の教室でリンチにより殺され、遺体は文京区本郷の東大附属病院構内にパジャマ姿で遺棄されました。文学部自治会の学生（革マル系）は川口君を中核派のスパイとみて自白と自己批判を強要しようです。二文の教務副主任の職務から九月に解放されて間もなくのことでした。

これからしばらくの間、大学は文学部を中心に混乱の極致に達したと言えます。丁度このときドイツでお世話になったボルノー教授から東京に来られるとの知らせがあり、折角東京に来られるのなら早稲田大学で講演をしていただけないかとお願したところ、快く承知されました。「直感に還れ」という題で大隈講堂で講演することになりま

した。丁度一月一〇日の頃で、本部前では「革マル」弾劾のデモと大きなシュプレッヒコールの音声が大隈講堂の中まで聞こえましたが、無事通訳の責任を果たしたことを思い出します。講演会の後大隈会館で夕食をとりながら、ドイツでは六〇年代の後半に学生が騒いで大変であったということを書いていました。

## 八 一文の教務主任となつて

川口事件が起こつてすぐ、第一、第二文学部長は辞任しました。後任の第一、第二文学部長選挙が行われましたが、次々と行われた選挙で誰が選ばれたか確認できないぐらい混乱していたのです。しかし教授会では、当然のことながら一、二文の学生自治会には活動停止の措置が決定されました。二文の自治会の学生は臨時学生大会を開き（一文は別個に学生大会を開いた）、新執行部を選びました。教授会は新しい二文学部長に英文科の守屋富生先生を、学生担当教務主任に三浦修先生を選出しました。しかし、この二人も一九七三年三月に辞任し、一文、二文ともに教授会で後任を選び決定することがなかなか出来ません。選出されると、その場で辞退を申し出、なかなか後任は決まらないのです。学部長として選出されても、学生担当教務主任をお願いすると、引き受ける人がいないのです。一文のほうはなかなか決まらず、まず二文学部長として小山宙丸先生が選出されました。何回目かの選挙で一文学部長に辻村敏樹先生が選出されました。辻村先生は私に声を掛けてくるに違いないと、直観的に思いました。「三十六計逃げるに如かず」で外出して姿をかくしました。辻村先生は私の自宅までいらつしやつたようで、私は逃げたのです。ちょうどその頃法学部の塩屋竹男先生とショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』続編（白水社）の翻訳がすすめられていました。

辻村先生はまず、大学の危機であるから岩波を翻訳の仕事から外して欲しいと塩屋先生を説得しようです。次に白水社の編集者を説得し、外堀は完全に埋められてしまいました。もう逃げることは出来ません。こうして、これからしばらく大学のために尽力しようと決心せざるをえませんでした。

まず、一文、二文の新しい体制を明らかにしておきましょう。

第一文学部長 辻村敏樹

教務主任(教務) 小林路易 同副主任 春木 豊

教務主任(学生) 岩波哲男 同副主任 野中 涼

第二文学部長 小山宙丸

教務主任(教務) 谷口龍男 同副主任 井上 登

教務主任(学生) 清水 茂 同副主任 村山吉廣

以上の体制で川口事件の後始末にかかったのです。私の辞令発令は一九七三年六月一五日付けでした。他の人は、早い人は四月一日、遅くとも五月には職務についていましたが、とにかく全員揃った訳です。私は密かに、怪我人は出さないよう努力しようと決心しました。また覚悟したことは、もしかすると怪我をすることがあるかもしれないということです。

六月一六日(土曜日)学担就任の翌日、大学に行きますと、入り口の所で守衛さんに呼び止められました。「黒いヘルメットをかぶった他大学の学生集団が裏の塀を乗り越えて入構し、木造校舎の空いた教室に入りました」と。大急ぎで教務の部屋へ行くと、すでに二文学担の清水茂先生が来ていました。二人で相談して学生集団のリーダーを呼ぶことにしました。

その間に、馬場下の交番まで出張ってきた、牛込署の署長から電話がジャンジャン入りました。確か二、三日前、どこかの警察がどこかの大学で学生集団を大量検挙したというニュースがあつたばかりです。署長は言います。「た

だちに機動隊の中に入れて全員逮捕していいか」。つまり牛込署も学生を検挙して手柄を立てたいみたいです。私は、「お待ちください。今説得中ですから」と答えました。警察の説得も大変でした。今、文学部は授業中で中庭に面する部屋は授業を受けている学生でいっぱいです。機動隊が戦闘服姿で盾を持って入ってくれば、何も知らない中庭にいた授業を受けていない学生は、興奮して機動隊に石を投げて逮捕されたりしては、不愉快な思いをするだけかもしれません。普通の学生には迷惑です。学生集団のリーダーとおぼしき者がやって来しました。社青同解放派（通称、青カイ）のよく見かける男でした。「ただちに入ってきたところから退去しなさい。さもないと機動隊が入ってきて、全員逮捕するぞ」と通告しました。こうしてこの一団は大急ぎで退去しました。

彼らが退去すると、何人かの私服警官の中に入れて現場検証をしました。木造校舎の一階の中教室の教壇の下から鉄パイプが大量に出てきました。警察からの報告によると、彼らの仲間の別働隊が裏から侵入して文学部を占拠しようとしたが失敗したとのことでした。

学担就任の最初から驚かされました。

## 九 革マル派との対峙

この頃ある学生の父親が相談にみえました。この方の相談というのは、一文心理学科の女子学生のことでした。早稲田の文学部に入って、色々やってみたいという思いから、入学するとすぐ早稲田祭実行委員をやりたいと申し出たらしいのです。当時、早稲田祭を実質支配していたのは革マル派でした。

そこで客観的には彼女は革マルであると判断されたのでしょうか。この父親の相談は、革マルと誤認された娘をどう

やって保護してもらえるのか、というものでありました。丁度この頃革マル派と中核派の内ゲバ争いが激しくなつて、文学部の卒業生で学生時代に革マル派の人間として活躍した者（一般にヌケマルとよばれていました）が中核派に襲われたりして、やがて立花隆の著書『中核VS革マル』で一般知識人の関心と呼ぶような事態になつていきました。事実騒動があるところからともなく現れて、色々とリーダー格の革マル派学生に指示していたIも、新聞によると内ゲバで殺されました。

父親によると、この女子学生のもとには発信人不明の手紙が送られ、「あなたは中核派に狙われている。どこかに姿を隠した方が良い」との警告とも脅しともつかない文書を何回も受け取りました。本人はもとより、父親も心配で、どうしたら良いでしょう、という相談です。早速牛込署に連絡して善処して貰うことになりました。所轄署では、しばらくパトカーを彼女の自宅の近くで待機させて、様子を見て貰いましたが、夏休みには親戚の家に行き、年が明けて無事卒業すると、父親が無事卒業しましたと挨拶にみえました。良かった！と思いました。

革マル派の学生自治会には活動を停止されているはずですが、しかし、自分たちの勢力をなんとしても保たなければならぬと考えているようでした。あるとき、数名の学生が、外套を着てその下に木刀を隠し持って、しかも外套の下からその木刀がチラッと見える。つまり敵はそのチラッと見える木刀の故に恐ろしくて近寄るのが恐ろしい。恐怖を与えて相手を言いなりにする。暴力団と似た戦術をとる。それが革マルの狙いなのです。

この頃朝八時、大学の正門が開くと同時に入構して警察と連絡するのです。大抵は向こうから電話がかかってくるのですが、現在学内に学生が何人くらいいるかというのを問うてくる。学内から殺人事件を起こしてしまつてから、警察も情報が欲しいらしい。短い期間でしたが仕方ないことでした。

さて、授業を受けようとして文学部に来る学生で、革マルに都合の悪い学生を見つけると、革マル派の学生で取り

囲み文学部に入構しにくいようにする。こうして革マルの牙城を守ろうとする。このようなことを黙認すれば早稲田の文学部の自由は失われる。当時の革マル派の指導者Wを呼び、一文の副主任であった野中涼先生に陪席をお願いして、この代表を叱りました。革マルの指導者も小粒になっていました。彼に言いました。「授業を受けようと武器も持参することなく教室に行く学生仲間を多数で取り囲んで暴力を振るうとは何事だ」。「暴力、暴力と言いますが、国家の暴力をどう思いますか」。「国家をどう思うか、君らの知ったことか。小生の方が君たちよりラディカルかもしれないぞ」。私のこの発言を聞いて、Wは驚いて帰って行きました。

革マルよりラディカルな人物を理解出来ません。彼らなりに分析した結果、この教務主任は「勝共連合教務主任」であるという結論に達したようです。大きな立て看板が立てられ、その上には「勝共連合教務主任岩波を葬れ」と大きな字で書いてあります。しかも文学部キャンパスだけでなく、本部キャンパスにも大々的にこの立て看が出されています。よほどやり込められて悔しかったのでしょうか。

私の頭の中には、ヒトラーの時代にヒトラーを暗殺することが多くのユダヤ人犠牲者を救うことであると、当時の軍部に協力し、ヒトラー暗殺の計画に加わったが、その計画が失敗し、強制収容所で殺されたD・ボン・ヘッファーのことが念頭にあったのです。彼らに分かるはずもなかったのです。でもそのためうっかりキャンパスを歩いて革マルに見つかり、小突き回されたりしました。そんなことは覚悟していました。

## 一〇 一文自治会新執行部との関わり

革マルが支配する自治会に対し、学部では、セクトに関係のない学生たちがこのような暴力支配を放置できないと

ばかり立ち上がったのを、学担として手をこまねいているわけにはいきません。授業の切れ目切れ目には、旧革マル自治会の連中が新執行部の学生を見つけると、取り囲んで暴力を振るうのを見つかるや、間に割って入りなるべく急いで教室に行く様に指導しましたが、そのうち、新執の委員長とよく二人で対策について打ち合わせを行いました。二人が会って色々相談をすると当局と新執がまるでゲルになって革マルを弾圧すると思われるでもまずいので、学外で意見を交換しました。しかし後で、委員長が新執行部の委員に学担と会った件で報告をすると、スパイがいて、学担と会う委員長は民青の手先だとビラをまかれました。何回か学外で会いましたが、新宿の盛り場、大学の近くの喫茶店、この時は革マルのスパイが見張っているのではないかと気にしながら。あるいは目白などで。セクトのこと、暴力のこと、ナチスのこと、何でも話し合いました。

この新執行部の委員長のH兄は冷静に事態を把握し、革マルが暴力を振るっても対抗的に暴力を用いるべきではないと、最後まで、理性的でした。そう言えば学友のY君のことを心配していました。かれは作ったばかりのローゼンストックの眼鏡を革マルに殴られたとき壊されたというのです。

H兄は就職が決まり、朝日新聞の高知支局に赴任することになりました。赴任にあたり結婚式を挙げたいがと申し出、私で良ければ式を挙げてあげますよ、ということになり、四国に赴任する前に名古屋のホテルで結婚式を執り行いました。それから二〇年、ある年の正月、突然お嬢さん三人を連れ、わが家を訪れました。自分が学生時代に訪れた鎌倉をお嬢さんたちに見せるために関東に家族を連れてきたらしいのです。挨拶に見えたH兄夫妻と初めてお目にかかった三人のお嬢さんたちの幸せを祈ってお別れしました。さらにH兄は、定年後京都の妙法院の菅原先生を訪れています。

一文の教務主任に就任して、瞬く間に前期が過ぎようとしていました。前期と後期の間に試験があります。一九七



三年七月一三日。つまり一三日の金曜日で、今でもその日のことを覚えています。夾竹桃がよく咲いている良い天気の日でした。夏休み前の試験で学生の数は多くはありませんでしたが、新執行部が久しぶりに集まっており、また代表が一人覆面をして教務主任室に入って来ました。その学生は試験の中止を要求するから中庭まで出て下さいと言いました。中庭へ出てみると一〇〇名ぐらいの新執の学生が集まり、混乱のなかでの定期試験を中止して欲しいと要求してきました。これに対して答えているとき、正門の方から旧自治会系の学生集団が二〇〇名位乱入して来たという情報が入りました。中庭の新執系の学生は一斉に逃げ出しました。私は大急ぎで研究棟最上階に向かいました。そこにキャンパス全体への放送設備がありました。そこから急いで、立ち入り禁止の放送をし、一階に降りました。途中でヘルメットをかぶり、多くは覆面をしている学生の一団とすれ違いました。その中に顔見知りの学生は見当たりませんでした。もつとも、大部分は覆面をしていましたから見分けがつかなかったのかも知れません。それにしても、他大学の学生と思われるゲバ棒を持ったリーダーのもと、軍隊のように一団となって行動する彼らを見て、時代が昔の軍国時代に帰ったような恐ろしさを覚えました。

学内から学生が退去して、機動隊が入ってきて学内を一巡しました。何か所かに血の塊がありました。八、九名の負傷者が出たようです。死者が出なくて幸いでした。

後から得た情報によると、本部に集合した旧自治会系の学生は、他大学の学生の応援を含め二〇〇名位、戸塚グラウンド上の三叉路に出て、穴八幡の脇のバス停から交番前を通り、文学部正門から記念会堂前に進み、その前で隠し持っていた短い着脱式の鉄パイプを瞬時に繋げ乱闘用ゲバ棒にして、それを振りかざして文学部の中庭に乱入したらしいのです。その鉄パイプで学生が怪我をしましたが、決して怪我人は出さないようにしよう并注意していたのに、残念な結果になってしまいました。

この日、私を中庭に連れ出した学生は覆面をしていました。平穏な時であれば、「用事なら覆面をとれ」ぐらい言うところですが、学生担当教務主任として腹も立てず、呼び出しに応じました。向こう（学生）が覆面をするならば、髭を伸ばしてやれと、いたずら心とユーモアを交えて、続く夏休みに髭を伸ばしました。髭は一九七三年の夏休み明けから七四年秋、学担の任期が終わりドイツに行くことが決まり、その寸前まで伸ばしました。髭を伸ばしたままの姿で教授会にも出席し、ゲバ学生を怖がるお年寄りの先生は「その格好はなんだ」と言ってきました。私は「髭を生やしてはいけませんか」と、とりあいませんでした。岩波は若いくせに生意気だと思われたのでしょうか。しかし、大部分の先生は髭に込められたユーモアを理解してくれました。ドイツで日本赤軍に間違えられてはかなわないと思い、残念ながら渡独前に髭を剃り落としました。

学担は一年と少して終わりました。次の学部長の小林昇先生が引き続き学担をやって下さいませんかとおっしゃいましたが、「しばらく研究をやらせて下さい」とお断りしました。

一九七三年の夏休み以降は大きな事件もなく過ぎ、ドイツ行きの準備ができました。おかげで、わずか半年ですが、ベルリン大学でゴルヴィツァー先生のもとで心ゆくまで研究に励むことが出来、博士論文『ヘーゲル宗教哲学の研究』（一九八二年）を帰国後完成することができました。（未完）

※本稿の一部は、早大キリスト教青年会側面史刊行会編集・発行『インタビューによる早稲田大学基督教青年会百年側面史』（増補再版続編、二〇〇九年）と重複する部分がある。